

## 2019 年度日本語教育実習 最終レポート

私は 3 年間で日本語教育に関する様々なことを学んだ。

1 年生では「日本語学概論」、「日本語教育方法論 1・2」を受けた。「日本語学概論」では、日本語の文法や発音の仕方、心理学などを学んだ。私が普段何気なく使っている日本語をきちんと勉強すると、とても難しく感じた。外国人学習者は日本人でも難しいと感じる勉強をしなければならないのかと、日本語学習者の大変さを理解できた。「日本語教育方法論 1・2」では教え方だけでなく、クラスルーム運営なども学べた。今まで教える側の立場になったことがなかったので分からなかったが、普段授業を行っている先生は立つ場所から声の大きさ、板書の仕方など様々なことに気をつけていることが分かった。また、授業中に視聴した T 先生の英語の授業は、とても印象的だった。T 先生の授業を受けている生徒は楽しく、自主的に勉強していた。私が中学生や高校生の時の英語の授業は、つまらない授業ばかりだった。ただ、単語を覚えたり、プリントの問題をひたすら解いたり、教科書の文をひたすら訳したりなど、作業のような勉強ばかりしていた。しかし T 先生は、様々なゲームで、生徒が楽しく英語を学習できるように工夫していた。時には外に出て授業をしていた。その授業で感じたのは、生徒が楽しめるようにどんな授業にしたらいいかということはもちろん、生徒が自主的に勉強するためにはどうしたらいいのか、生徒が英語を好きになってくれるにはどうしたらいいのかという、T 先生の努力と思いやりだった。どの仕事に就いても慣れというものは出てくるし、手を抜くこともあるだろうが、T 先生は手を抜かず生徒と真剣に向き合っていた。その姿に「私もこんな風に日本語を教えることができたらいいな」と感じた。

2 年生では「異文化間コミュニケーション 1・2」「日本語教育方法論演習 1・2」を受けた。「異文化間コミュニケーション 1・2」では私の常識はあくまでも私の常識であり、私以外の人にとっては私の常識は常識ではないことが分かった。私たちが普段何気なく使っているジェスチャーが他の国では反対の意味をもっていたり、あるいはタブーだったりする。また、日本では集合時間の 5 分前には集合場所に到着していなければならないが、日本以外の国では集合場所に集合時間ぴったりに到着したり、3 時間後によく到着するのが普通だったりする。今までの私だったら、集合時間に遅れる人に対して「失礼だな」という感想しか持たなかったが、この授業を受けてからは「この人は集合時間に間に合わせる事が難しいんだな」と考えるようになった。これは日本語教育に関してとても重要なことだと思う。私たちが日本語を教える相手はもちろん外国人である。私とは異なる文化背景で育ってきた方々なので、相手の文化や宗教を知り尊重していく姿勢が、日本語教育において重要なことだと思った。また、「日本語教育方法論演習 1・2」では、教案や教材を作り、実際に授業をした。教材を作るのは楽しかったが、使い方に苦戦した。文字カードや絵カードは、学習者にちゃんと見えるように持ち上げなければいけない。また、ホワイトボードに貼った後に、立つ場所なども考えなければならず、大変だった。そして、教案を初め

て書いている時に、こんなに細かく授業でやることを書かなければならないことに驚いた。授業内で行う活動に加えて、指名の仕方や時間が余ったら何をするのか、この問題で間違えたらどう対処するのかを、事細かに記載しなければならなかったのが、とても印象的だった。しかし授業では、これらのことを記載したおかげで助けられる部分が多かった。実際に授業をしてみた時には、時間配分が難しかった。声の大きさ、授業で行った活動の改善点などを、同じ学年の実習生や先輩たち、そして先生に教えてもらった。授業をするということの難しさを、身をもって実感できた。

3年生では、前期は中国人留学生に、後期は北九州 YMCA の学習者に対して実習を行った。中国人留学生に実習授業をするときは、日本語がかなり通じるということで、緊張はあまりしなかった。しかし、ロールプレイをする際に、どこをどのように間違えるのか、どのような質問がくるのか予測できない、という不安が大きかった。そこで、ロールプレイを担当するときは、学習者たちが分からなさそうな単語や文章を予測して、説明を考えた。ある程度準備したとしても、やはり自分たちが予測できなかった間違いなどがあったので、その場の対応力が身についたと思う。また、発音指導の機会もあった。発音は私が1番苦手な分野だったので、何回も CD を聞いて練習をした。しかし、自信を持てないまま実習授業に臨んだため、自分の声がすごく小さかった。声の小ささは自信のなさもあるが、相手に伝えたいという気持ちが弱かったように感じる。そこで、後期ではそれらを課題にし、実習授業を行うことを意識した。

後期の北九州 YMCA の実習は、反省の連続だった。私は以前インターンシップで北九州に住んでいる外国人の方々に日本語を教えたことがある。その時に担当してくださった方は、北九州 YMCA で働いたことがある方だった。その方は、「YMCA で働いていた時に『日本語で教えるな』と言われた」とおっしゃっていた。その時は、その言葉の意味が理解できなかったが、後期の実習授業に行って理解することができた。前期の実習で教えた2人の中国人留学生は日本語レベルが高かったが、YMCA で教えた学習者たちは初級であった。私がいくらやさしい日本語で教えたとしても、学習者たちが日本語の単語をある程度知っていなければ、完全に理解することができない。私は説明するとき、いつも長い文章で説明してしまう。そのことに気づいた私は、教材や説明の仕方に気を付けた。新語の説明の時は極力絵カードを見せるようにし、説明が難しいものは実物を見せた。それでも、指名した学習者が問題を理解してなかったことがあり、その時に失敗を犯してしまった。問題を分かりやすく説明しようとしたときに、ずっと長い文章で説明してしまったのである。「とっさの対応は普段の癖がやすい」ことに気づいたので、より分かりやすさを意識して授業に取り組もうとした。また、前期の実習授業の課題であった声の大きさはちゃんとできた時もあったし、できなかった時もあった。そこは残念であったが、全体的には、ある程度効果的な工夫ができたと思う。少しでもわかりやすく伝えたいという気持ちは、声の大きさだけでなく、授業で行うすべての活動に反映されることに気づくことができた。

「私の日本語教育哲学」では、楽しく勉強ができる授業を作りたいと書いていた。実際

自分の行った授業はそれほど楽しいものではなかったと思うが、分かりやすく伝えようという意識が強くなったと思う。私は以前から友達と何かについて話す時に、話している何かについて、相手も分かっているだろうという前提で話していた。それは間違っていて、相手がわからないかもしれないという前提で話をすべきである、ということに気付いた。それから私は、相手が知らないかもしれないと思ったものは、説明するように心がけている。しかし、それでもまだまだ意識が足りずに、会話がスムーズに進まない時もあるので、私はこの意識を強く持ち続ける必要があると思っている。

私は日本語教員ではない道に進む。就職活動で面接をする際に、自分はどんな人物なのかを説明する時に、相手にわかりやすく伝えようとする意識を持ちながら面接に臨みたいと思う。また、面接だけでなく、誰かと話す時も、この意識を忘れることなく接していきたいと思う。